

◆第3回◆

「現代と親鸞」公開シンポジウム

—〈いのち〉という語りを 問い直す—

開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託 中村玲太

2022年2月12日（土）に第3回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催した。前回に引き続き、オンラインでの開催となった本シンポジウムについて要録をお届けする。これまで多様な分野の専門家をお招きし、多角的に問いを深めてきたが、本シンポジウムはより研究領域を横断したものとなった。シンポジウムテーマに掲げた〈いのち〉という語りが、それほどまでに広域に語られているということでもあるのだろう。

〈いのち〉という言葉のもつ肯定／否定のイメージについては、すでに『岩波講座 宗教』第7巻「生命——生老病死の宇宙」（岩波書店、2004）の序講に池上良正が指摘している。負の面としては、〈いのち〉という統合性・全体性を賛美する言説が全体主義へと向かう危険性などがあるとする。あるいは、「いのちの輝き」といった美しい言葉では決して美化することのできない汚辱、苦悩深き人間の現実があるのではないかとも言う。〈いのち〉という抽象的な言葉では捉えきることのできない「私」「あなた」の物語があるのではないだろうか。そして「私」に向かう以上、「大切」「輝き」という形容では覆い隠すことのできない私の罪悪・苦悩の問題がある。

〈いのち〉という語りによってむしろ見え難くなっている人間の問題を掘り起こすことをシンポジウムテーマとした。しかし、それでもなお必要な〈いのち〉という語りの側面も論じられ、まさに多角的な検討の場となった。



◆問題提起とコメント

I

人間的行為の葛藤と 〈いのち〉の言説

長谷川 琢哉（親鸞仏教センター嘱託研究員）

〈いのち〉という表現は、現代においてさまざまな場面で用いられているが、宗教の領域においてもよく目にするものだ。真宗大谷派でも、宗祖親鸞聖人七百五十回忌のテーマとして「今、いのちがあなたを生きている」という文言が選ばれた。〈いのち〉の語りは、生命の私有化が目につく現代社会において、重要な批判的機能をもつことは間違いない。しかし同時に〈いのち〉という表現はあいまいさを含み、誤解を生じやすいという側面もある。例えば、大いなる〈いのち〉が個を包み込むイメージでとらえられる場合がその典型である。仏教の「無我」がそのイメージと結びつき、時に全体主義的傾向をもつ思想と結びつくこともあった。自己のはからいを否定する他力信仰は、特にその危険性に注意を払う必要があるだろう。

清沢満之が弟子たちと提唱した「精神主義」にも、同様の危険性が指摘されてきたが、本発表では、清沢の論考の中で取り上げられた具体的な事例（平重盛の葛藤）に注目し、精神主義における倫理的葛藤と宗教との関わりを再考した。本発表が最終的に見出すのは、調和的〈いのち〉の裏面にある個の絶えざる反省の必要性というものであった。

II

いのちとその産み育ての結びつきと分離 —「母性」、出生前診断、「赤ちゃんポスト」などを手がかりに—

中 真生（神戸大学人文学研究科教授）

〈いのち〉の誕生に関する語りには、いのちはかけがえがない、新たないのちの誕生は喜ばしいなどと、それが誰のどのような状況にあるいのちか、または誰が産み育てているいのちかということと切り離して一般的に語る語り方も多



い。他方で、新しいいのちが誕生することと、それを産み育てるのが母親であることがほとんど一体であるかのように分かちがたく結びつけられて語られることもある。「母性」という言葉を用いる語りがその代表である。これらのことは、子どもを産み育てることを私的な事柄と考えるか、公的な事柄と考えるかということにつながっているように思える。産み育てを完全に公的な事柄とするのも、完全に私的な事柄とするのもそれぞれ問題があり、それらの適正なバランスを取ることが重要であるが、それはいつの時代も難しく、議論が絶えない。

本発表では、まず「母性」をめぐる議論を見ることでその難しさを浮き彫りにした。その際、とくに産み育ての「個人化」、「自己責任化」の弊害に焦点を当てた。後半では、上記の事情を、現在の産み育てに関する具体的な問題について概観した。取り上げたのは、出生前診断、「赤ちゃんポスト」、養子縁組・里親・養護施設を通じた養育の（一時的/長期的）譲渡である。



〈いのち〉と政治のパラドックス

森川 輝一（京都大学大学院法学研究科教授）

一人では自足せざる人間たちが互いに手を取りあって秩序をつくり、ともに〈いのち〉をつなぐ営み、それが政治である。だが、秩序をつくり出す力、あるいは秩序がつくり出す力はしばしば、ほんらい守るべき〈いのち〉を脅かし、損なってしまう。国家や民族のため、みんなの〈いのち〉のため、と称して個々の生命を搦めとり、掠め取り、踏みしめる。では、そういうことにならぬよう、〈いのち〉の問題は個人の自由ゆだね、政治から切り離すことにしよう。政治は秩序の維持に徹し、この世に生まれる意味といった宗教的問いから人工妊娠中絶の是非のような個別具体的な課題まで、〈いのち〉の問題には極力立ち入らず、各人の信条や選好にまかせるのがよい。一般に自由主義と呼ばれるこうした考え方は、近代初頭の血まみれの宗教戦争の中から生まれ、イデオロギーの吹き荒れた20世紀の惨禍を経て、今日では広く受け入れられているように見える。

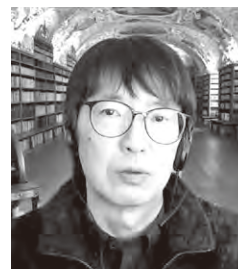


〈いのち〉を守るために、〈いのち〉の問いを避ける——しかし〈いのち〉の問いを問わずして、ほんとうに〈いのち〉を守ることができるのか。過酷な戦場で若き日の信仰を失い、戦後は現代自由主義の旗手となった政治哲学者ロールズの軌跡をたどりつつ、考えをめぐらせた。

コメント

コメンテーター 加藤 秀一（明治学院大学社会学部教授）

長谷川報告がとりあげた清沢満之の「精神主義」について私にはコメントする資格がないが、その問題意識の核をなす〈いのち〉言説の危うさ、すなわち「全体主義」への傾斜に対する警戒の念を深く共有する。「全体主義」が、個人よりも国家や民族といった「全体」を優先するというよりも、何よりもまず全体という名の存在者を恣意的に設定する思想の謂であるとするならば、〈いのち〉がその最たる実例であることは否定できない。



中報告における、「赤ちゃんポスト」が親・親族との関係の具体性を捨象された子の〈いのち〉それ自体を同定するという指摘はきわめて示唆的であるが、それも上記のような両義性をふまえてさらに掘り下げるべき論点だと思われる。もう一点、母性保護論争における与謝野晶子の主張は確かに現在の目から見れば、母子福祉的な発想の欠如という弱点をもっているというのはその通りだが、むしろ、「子どもは親や国家の所有物ではなく、その子自身のものだ」という思想に力点を置くものとして読むべきではないか。

森川報告における「出生＝唯一無二の個の始まり」という考えをめぐる考察は、長谷川報告と同様に「個と全体」という概念対そのものの批判という論点を惹起する。はたして「個」は「全体」に対する「部分」なのだろうか。報告の大部分を占めるロールズの宗教的立脚点とそのリベラリズムとの関係もきわめて興味深い。私としてはロールズが述べていない別の可能性を思った。すなわちル＝グインの「オメラスから歩み去る人々」が幻視する「共同体を離脱した者同士による高次の連帯」の可能性である。